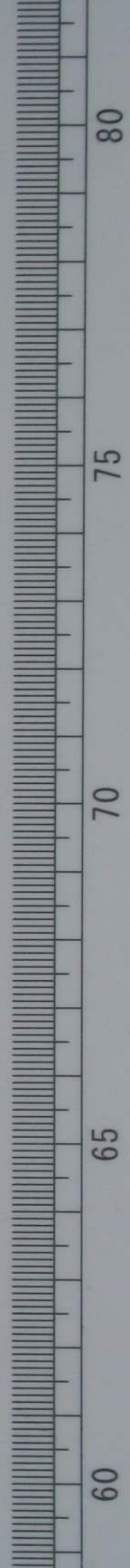


三人の處女

山村暮鳥



80

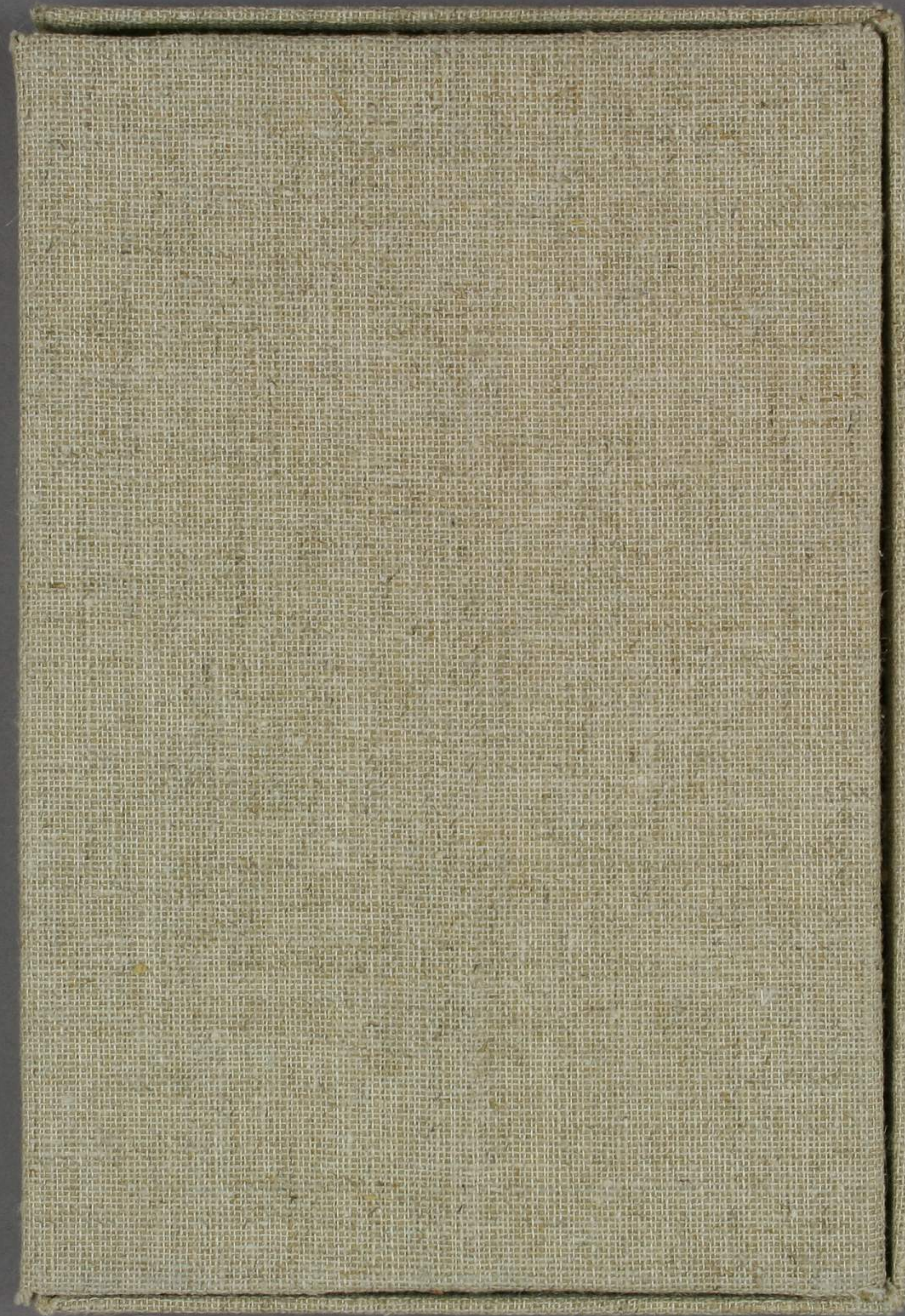
75

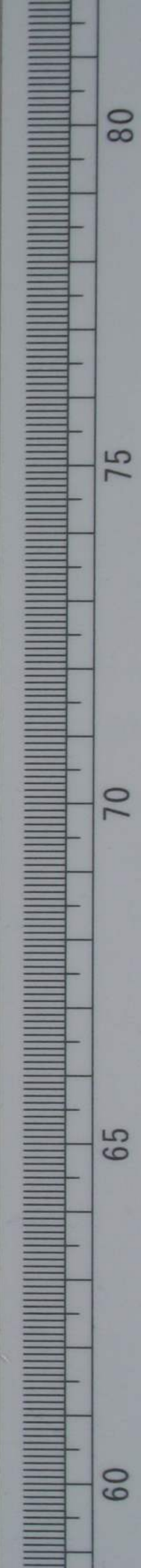
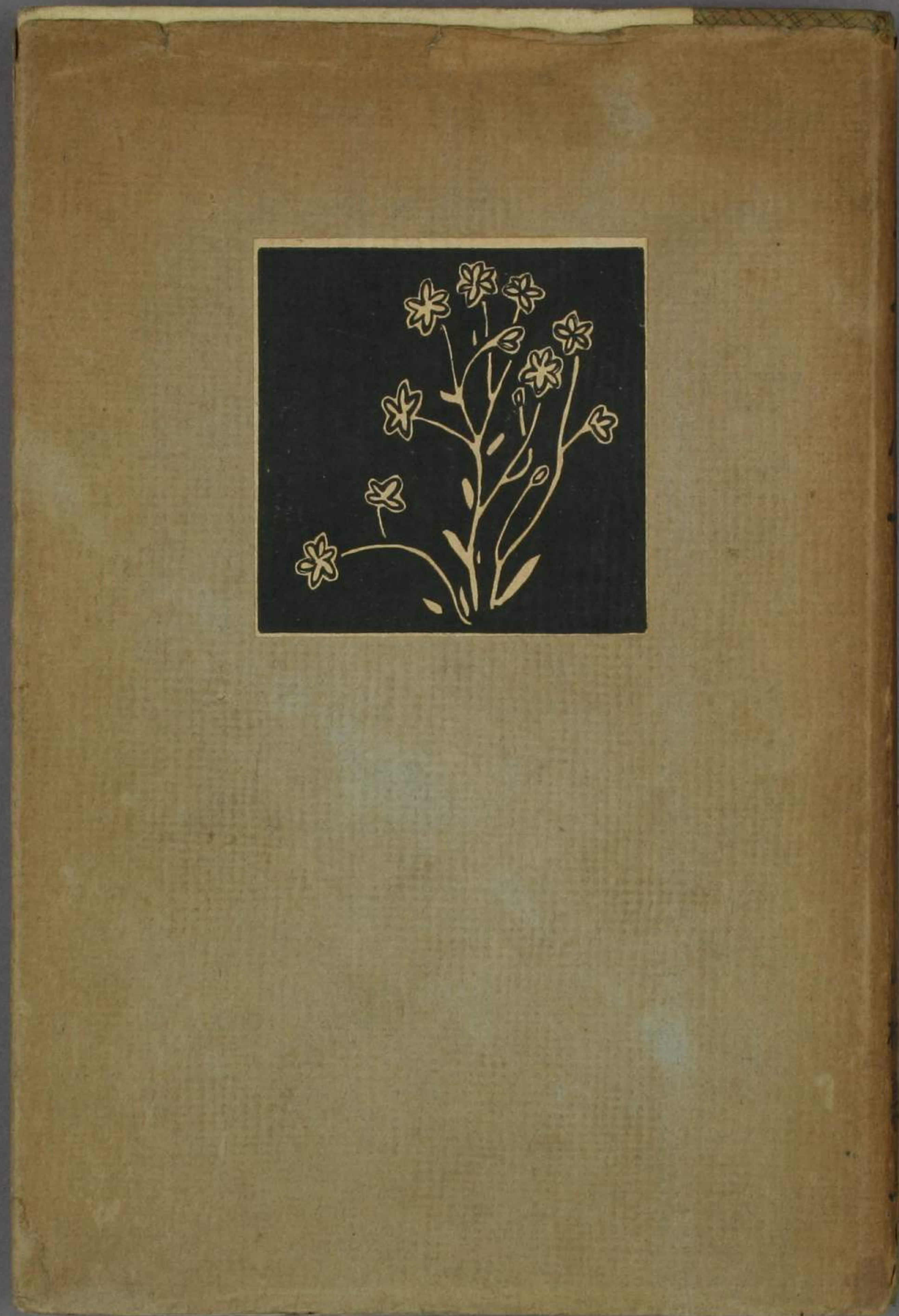
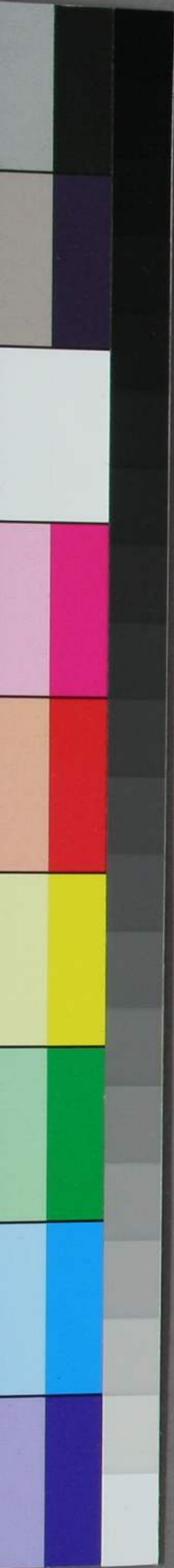
70

65

60

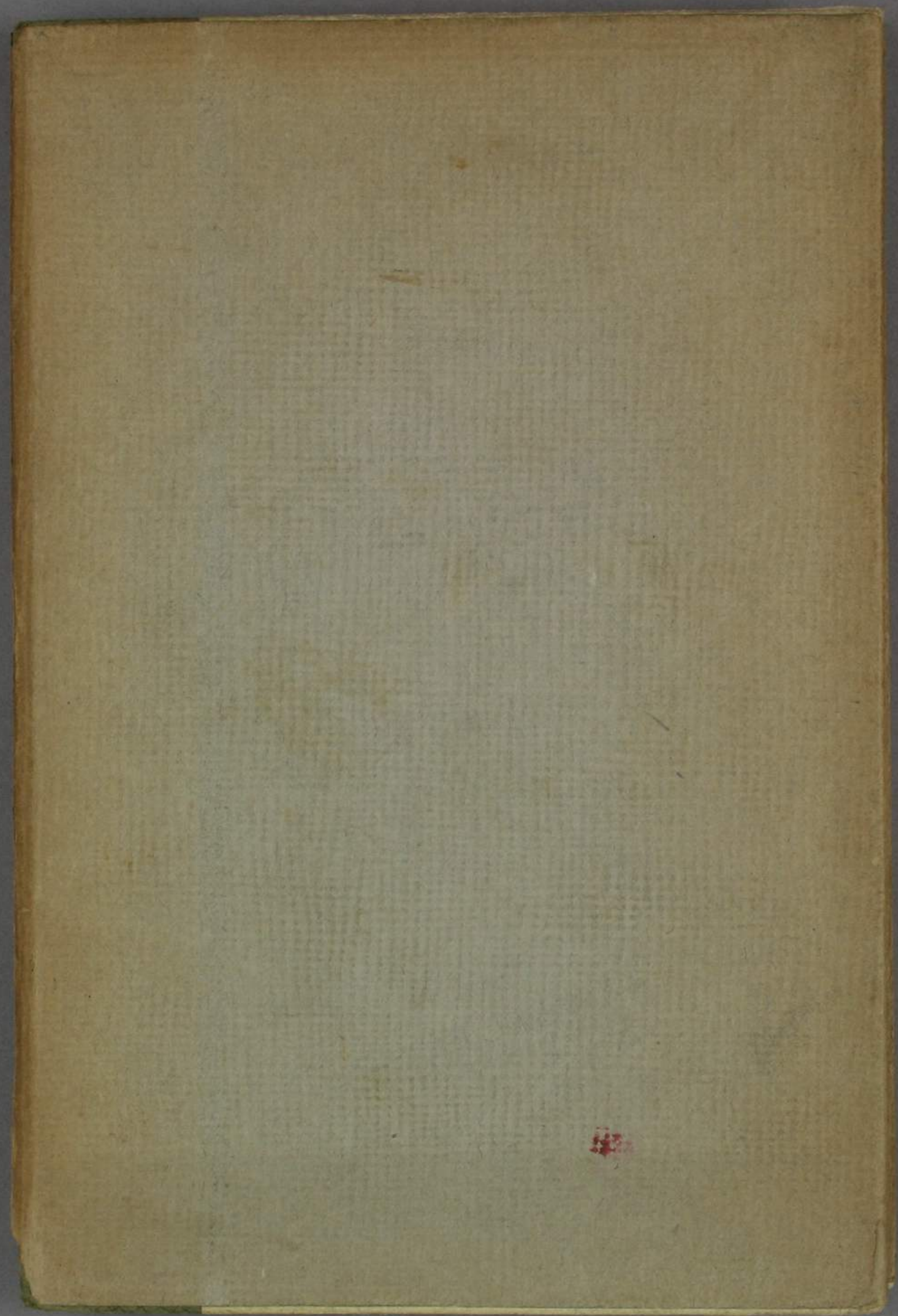
三人の處女 山村暮鳥





三人の處女

山村暮魚





三人の處女

山村暮鳥

60

65

70

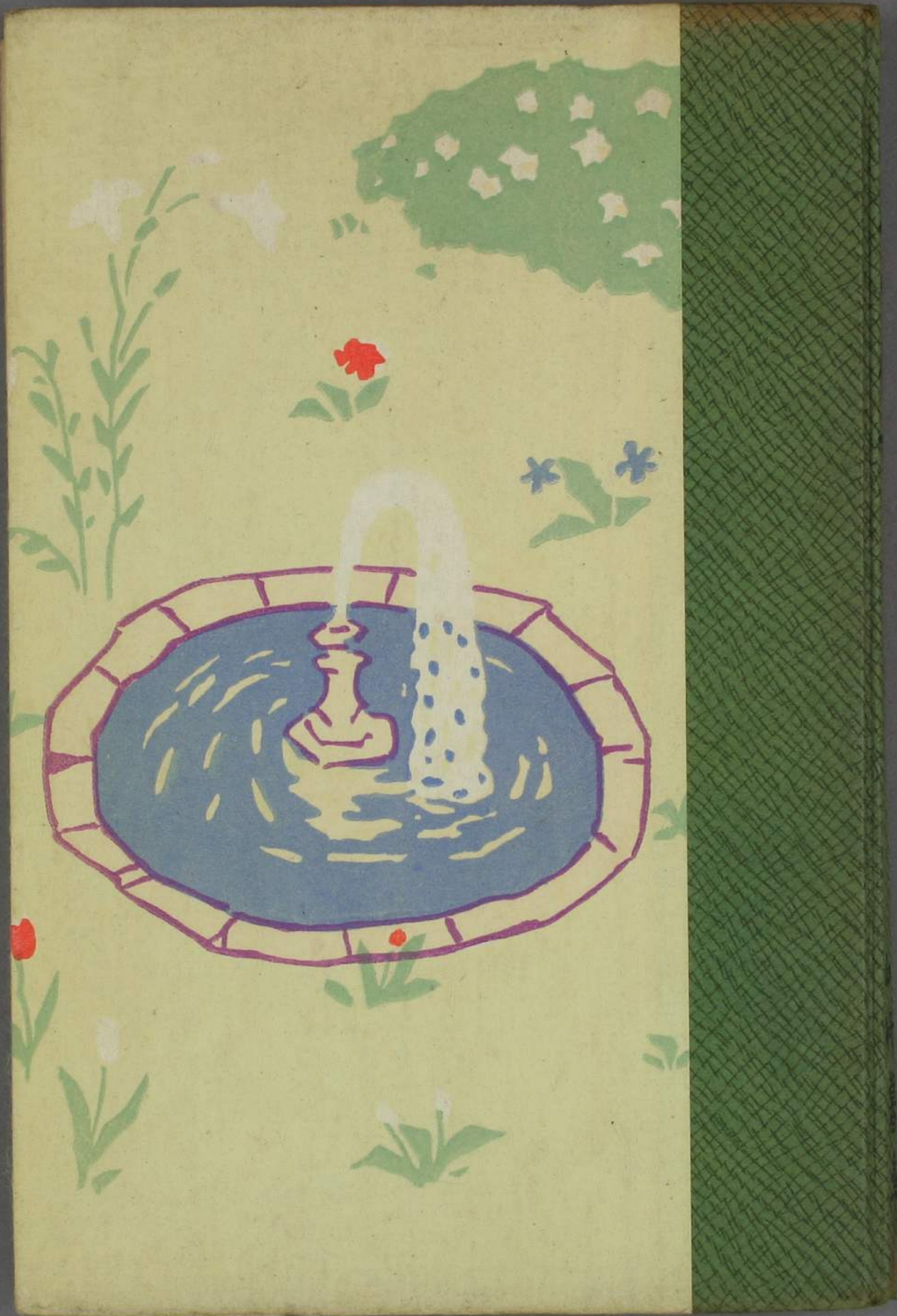
75

80

85

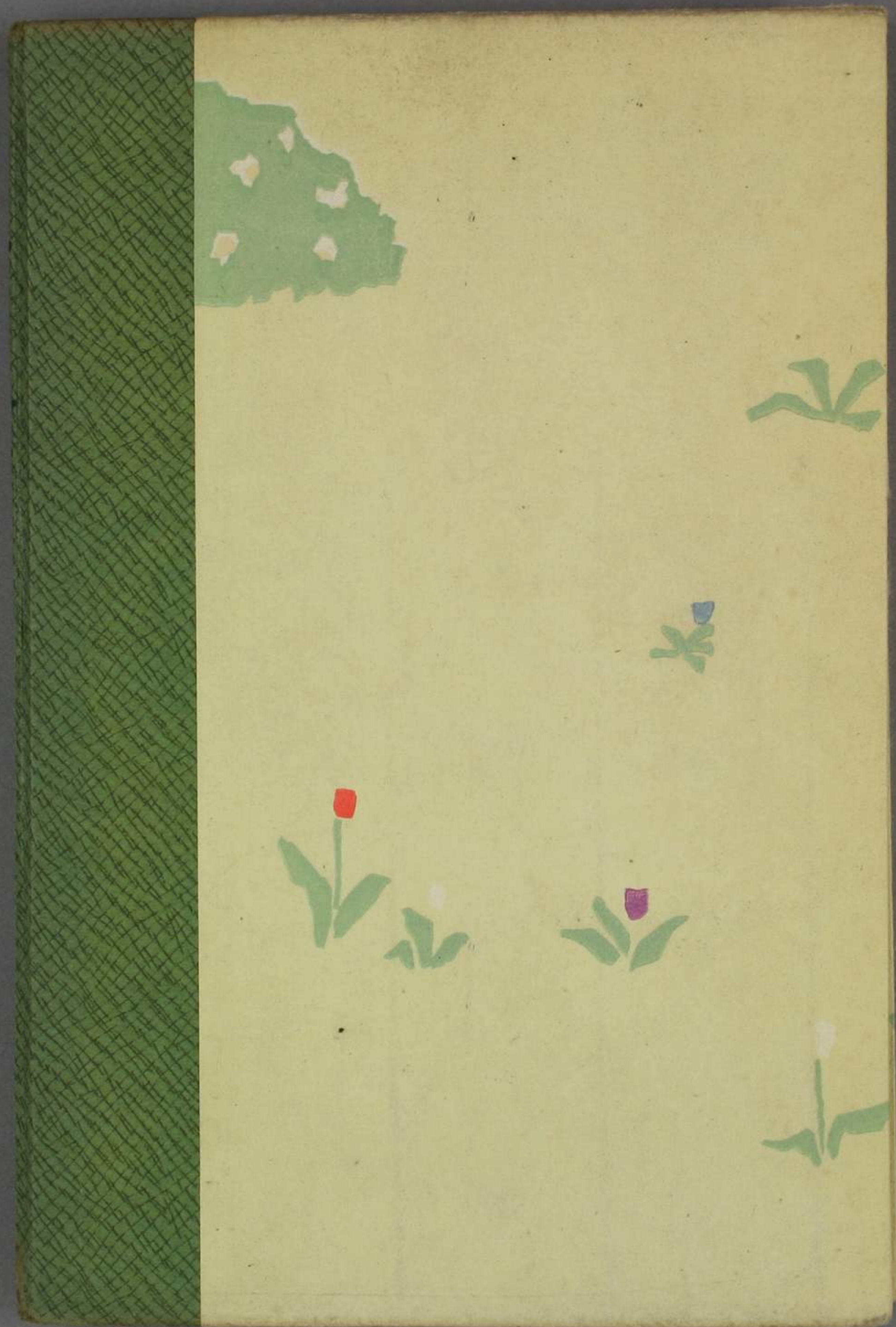
90

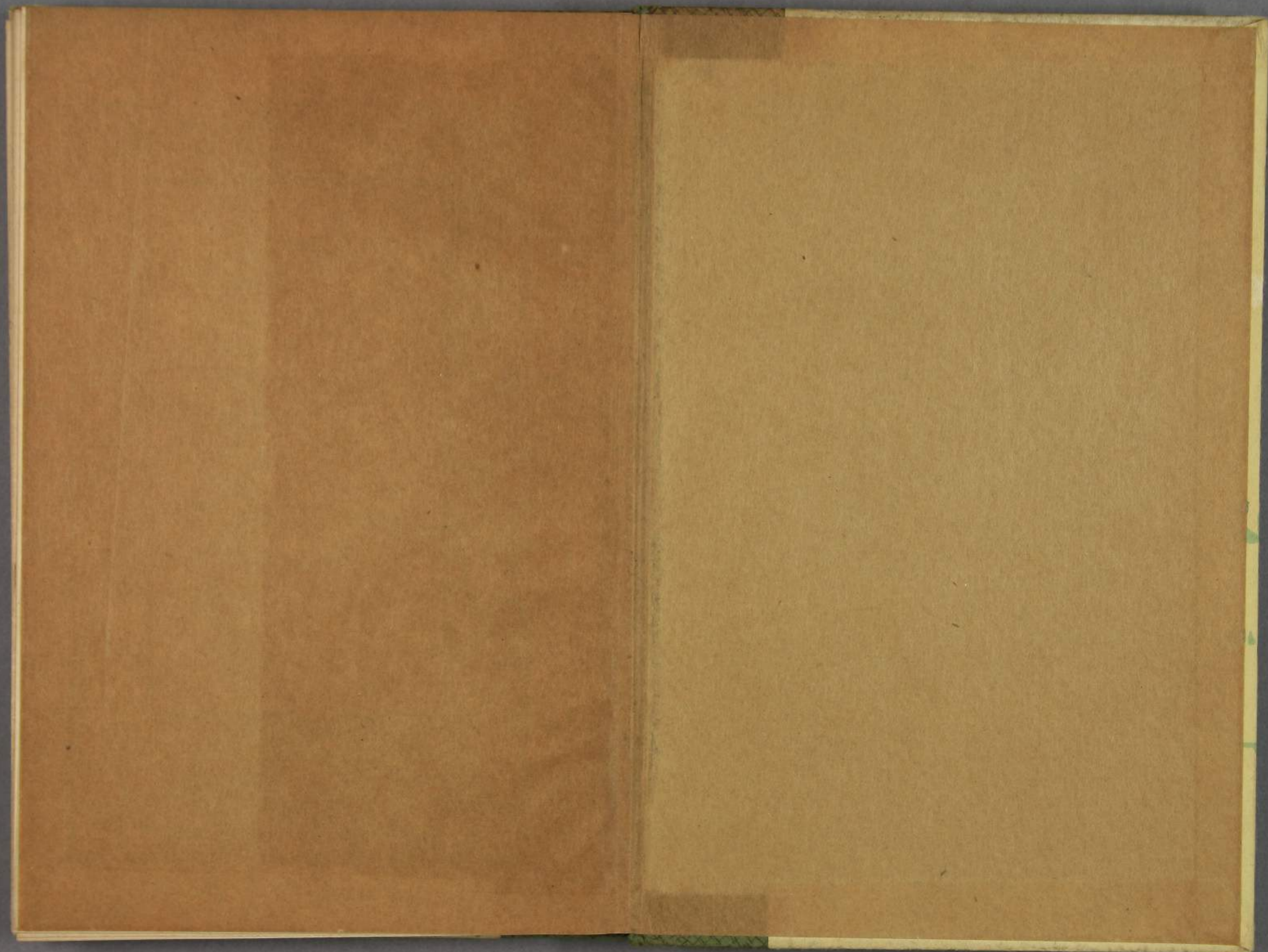
95



三人の處女

山村暮鳥





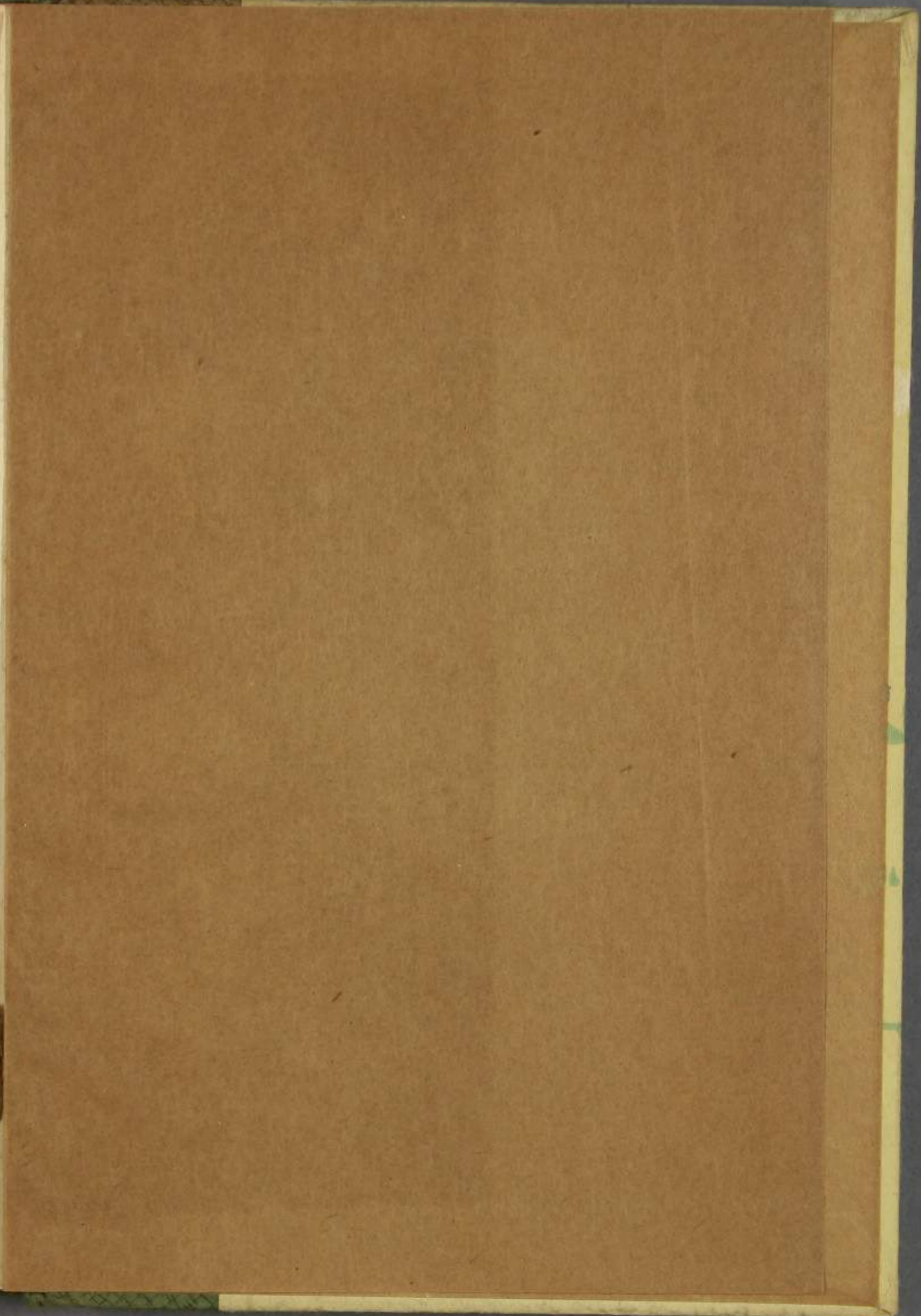
Handwritten:
1913.



三人の處女

山本 幸島

東京
新報社



*Shirane
Mar 20th, 1913.
M. J. K.*



三人の處女

山村暮鳥

東京
新聲社

序

情人を愛するごとく、私は詩を愛し、情人に別る、ごとく、私は詩に別れた。

私が情人を愛するごとくと言つたは、我ながら適切であるを覺える。「新體詩人」なる名稱は曾て私等に冠らせられた荆棘の冠のごときものであつた。それは實に忌まはしき嘲笑を意味し、堪えがたきほどの侮蔑を意味した。さういふ中で、私は隠すやうにして、かずくの詩を作つた。私は又、衆人の前で自分の爲したことを指摘された時は、あだかも吾胸の底深く秘したる愛を見あらはされたやうに、思はず吾頬を染めたこともあつた。

何といふ時の推移だらう。嘲笑と侮蔑とは、無意味な喝采に變つて行つた。恐らく今日の青年の中には私の斯く言ふことを眞實にはすまいかと思はれる程である。

今日の詩は、私に取つて、發達した舊の情人を見るがごときものである。私は別れなければ成らない時が來て別れたので、決して浮いた心で詩を捨てたものでは無いから、斯の舊

い馴染に對ひ向ふ度に特別の懐しみを感ずるのである。その領域は擴大せられ、その性質は著しく豊富にせられたことを感ずる。曾て私が Miss Poetry と呼んで居たものを、今では Madam Poetry と呼ばねば成らないやうな氣もする。

山村暮鳥君の『三人の處女』が出来た。夫人が生んだ新しい子の一人だ。新しい香氣と、淡い柔かな吸呼とに満ちた詩集だ。斯の母子に對して、私は曾ての自分の詩の愛を喚び起すものである。それが一生の忘れがたく美しい瞬間の一つであつたことをも感ずるものである。私は又、薄暮、情人を訪るゝごとくにして詩に對した曾ての自分にも勝つて、よりよく吾愛の意味を知るものである。

斯く言つたからとて、これらの事が『三人の處女』に何物をも附け加へるものではない。私はたゞ思つたまま、を、序にかへて、書き送るまで、ある。

夫人よ、詩の母よ、最後に私は貴女の『三人の處女』の爲に祝し、猶いつまでも貴女が若くてあることを祈る。

島崎藤村

SAGESSE

I 創造の悲哀

獨唱

かはたれの
そらの眺望の
わがこしかたの
さみしさよ。

そのそらの
わたり鳥、
世をひろびろと
いづこともなし。

黒き猫

つくづくと芝生は悩み、
うずくまる黒き猫、
はつ雪か。われらがうれひは
媚びてあやしき装薬す。
さて肉體の蒼白く、
知らずして秘めし願ひは
それとなくさえ失せんとし
逡巡ひつその猫の瞳に。

河岸

いりひの疲れ……
しだれやなぎの
晝のためゐき、
そよると陰影。
うつくしや、
滅び行くもの、
にんげんの
かなしき智慧よ、

しづかなる光に
溺れて眠り、
やなぎの
枝を水にひく。

氣の迷ひ、
ちらと落葉す。

(煩悶は
玉のごとし)

心

稗をぬかずば農人よ

こがねなす、

田の面のひかり、

稗をぬかずば

淫慾にぬらす秘密の、

涙は朝あしたの雨のごとし。

かなしみは光に黒く、

靈たましひの上を長く。

農人よ、

空は唯、ひろしと言へど、

とこしへに汎きのみなる。

とかげ

(F様に)

走る蜥蜴の

紫と金……夢の ILLUSION.

廢頹の園のなやみに

泌みてゆく、

さみしき入日。

(よきことをおとづれたまへ)

絲の如く、

樹々の梢をわたる風、

年頃の心ともつれて、

さながらに吐息の如し。

沈思と榲桲

かろくとぢたる眼^{まぶた}險^{あや}よ、

榲桲^{まろめろ}の黄^{きいろ}な吐息よ、

冬の日ざしのうつらと病み

眞摯^{まじめ}なる夢がながれる。

榲桲の黄な吐息を

かなしみつ、

やはらかき暗示の描^{あが}く

匂ひより深きは涙。

沼

やまのうへにふるきぬまあり、

ぬまはいのれるひとのすがた、

そのみづのしづかなる

そのみづにうつれるそらの

くもは、かなしや、

みづとりのそよふくかぜにおどろき、

ほとしづみぬるみづのそこ、

そらのくもこそゆらめける。

あはれ、いりひのかがやかに
みづとりは

かく、うきつしづみつ、

こころのごときぬまなれば

さみしきはなもにほふなれ。

やまのうへにふるさぬまあり

そのみづのまぼろし、

ただ、ひとつなるみづとり。

IDEAL .

空よ、時雨のつかれに

眠る落葉のすすり泣き

なだらかなる

をんなの吐息。

わが眞晝の良心は

ひえびえと、

蒼白く、

月の如し。

II 性慾と靈智

冬の辭

かはたれのどよめきが生む

うすむらさきの愛の靄

沈鬱なる白き指先にて

いと、いと、軽く、

雪空はびあのを打つ――

孤獨と執着

われは、その壁の色を
忘れ得ざり、
その悲しき愛を……

みだりがはしき合奏に惱み
水銀の如く、
影に、のがれむとして、
からむ鏗^{かえ}笛の單音。

いまでも吐息のほのかなる
すべてのものは
忍びやかに彎曲し、

月の夜なりけむ。
わが希望こそ、おどろき易き
駝鳥の可笑^かしき首と、うごきつ、
しかして消ゆれど

その愛と影のみ、
啼嘘^{すすり}きして青き映畫^{えいざ}に猶^{なほ}逡巡^{すんじゆん}ふ。

鏗^{かえ}笛は怪しき處女の性

いつとしも無く、

はたと絶え、

しづかに、おちにほやかに

捕えられたる光よ。

途上所見

1

うす靄のなやみの

まひるこそ美しけれ。

雪ふり蟲は雪の如、

ひかりに脆し。

雪ふり蟲のぞみは

うす靄の紫、

あえかなる夢と溺れつ、

胸の秘密をかなしまむ。

20

あえかなる夢をたよりに
雪ふり蟲のとびかふ。

2

風は獸けだものの如し、

樹々は

眞裸まはだかの女。

しづかなる日ざしの

つかれか、

夢と落葉おちば。

にんげんなれば

21

幸無さを、
われと煩ふ。

冬

1

わがかなしみは故もなし。
わがかなしみはひえびえと
過ぎにし日を、
わけゆく風なれ。

冬のなさけのまぶしさに、
鶉哥うぐいすの如くうつむきて、

うつろひ易き心の
しづかなるまぼろし描く。

希望は芒の穂にひかり、
冬は聲無き涙となり、
そつとわが心に忍ぶ。

おどろきやすき心の猫は
赤いとんぼの陰影に、
智慧なければ欺かれつ、

古沼の鈍き日ざしと

うつらふよをんなの肌と
わが憂愁のながめは。

眺望

わが夢は
かきはりの書のごとし、
そのうへに動く影。
悩まざるわが夢は
影をしていらだたしむ、
そよとしも風の匂はず。

たえかねし眼^{まぶた}のしぐさの。

いぢらしやすすり泣きしつ、
心はまたも君へさまよふ。

III 聲

人生

楳^{きん}梲^{ぎょう}は靈^{たま}的^{めい}に微^こ温^んし、
日^ひ毎^{まい}夜^や毎^{まい}の^のう^うす^す黄^{きん}なる^{なる}吐^つ息^{いき}は
に^にほ^ほひ^ひゆ^ゆく^く死^しの^の陰^{かげ}影^{かげ}、
曖^{あい}昧^{まい}なる^{なる}幻^{まぼろし}惑^{まど}の^のび^びあ^あろ^ろん。

お、お、友よ、

わがあを白きふところ手は
夢の如く、季節を摺む。

30

その風景のかなしさに……

勤行夜牀章

Gよ、自鳴鐘は六を打つた。
その悲しい柔かな光で洋煙は
蒼褪めた私に嫉妬を描いた。

ながれる光が私のまぶたに溢れ、
私の好む沈黙が渦を捲くと、
不思議な花は萎む。

Gよ、(信實は走る季節より迅速にそして

31

憎らしいものだ)

けれどもお前の圃はたけに蒔いた種子たねを

私は悔んで、それに

涙をかけ様とは思はない。

おお、愛の種子、悲哀の種子、

光を永遠な土にかくれて呪ふ種子、

それは眞晝であつた。

一すぢの髪の毛の夢で、

私がそつと生命いのちをつないだのを

知つてるかい。眞晝であつた。

床の上が青空になり、

玉の様な靈魂の肌はすすり泣きして

眠る情緒の腫を刺通した、

あの邪惡な銀の投槍で。

一秒ぎ、二秒、三秒

どうしたものだ。黒い雪は

もはや降つてしまつて、

おお、自鳴鐘は七を打つた。

お前はつひに來ないつもりだな、
それでゐて、唯、うれしさから、
その、私も權利のある
孤獨の果實このみを落すのだろ。

34

いいさ、私はどうせ千鳥なもの、
でもGよ、つひ忘れかねてはあの海を
甲斐なくも呼んでみるのだ。
春を待つ感覺に
再び青い希望の甦よみがえるまで……

おお、自鳴鐘は八を打つた。
またと歸らないものは
美しい線を引く、

おお、自鳴鐘は九を折つた。
私はあきらめまして、お月様。
その憂鬱いさなひの誘惑いそひが
雨となつたら私の頬はぬれますほどに
私は洋煙ちんばを消しますぞえ、
おお、お月様。

35

伶俐で、浮氣な、お月様。

猫

罪は無けれど猫、

その夜の瞳の

ちろろと悶えまどろめる。

愛と幸とのなまけもの、

ものうさにともしびも燼えよかし、

わが闇は

めづらしき星を示さむ。

BEAUTY

感電した空の沈黙、

ものの匂ひの蝙蝠がちらほら、

やがて形作る夜の性、

愛は孤獨のさみしさに

拇指を、そつと冷い唇くちびるにした。

まつたく忘れてゐたその希望の

どこでか遠く、

三味を離れた涙のうめき、

と、

わが靈たましひは眼盲めしひ、

ずるずると

落日の光にすがつて、

ひきずられた。

愛

憂鬱よ、その美しさに自らおのづか惑ふ、
われは冬の鶉ひよどり

過ぎし日の赤き木の實をもとめつ。

きみが髪の毛のうれしさに

からみ匂ふ空の秘密よ、

雪ならばちらちらと

燃ゆる眼まぶたの上かみにふり、

枯草の堆積つみかを埋めて、われらを

再び夢に泣かしむべけれ。

力

われは力なり。
われは、かなしき光なり。
その、時ならず青々と
夢の如くのびし芽なり、
或は玻璃窓を匍ふ。

光

明石町のシツエ様に

わが美しき感覺は
色白き鵝鳥のごとく、
三味線の糸の如く、
さみしさに、まよSOLO-SERENATA.

季節は影なれ、しかすがに
わが庭園のすたれゆく夜の惱みよ、

わが噴水は
かなしき夢に甦よみがえる。

かがやく過去に「死」を忘れたる推移ゆえ、
女よ、われは行方ゆくえを知らず。

光

びんつけ油の匂ひ
古めかしい鬘かみの形さては
鼈甲かめの中ざしの
飴色にさえやらぬ黒の斑。

手にさげたのは干鱈ほしがれい
お婆さんの歩みの遅さに
あとかな躓ついてゆく心

それが小さい悶えをする。

46

椿の花のおちてゐる

崖下のうら路、

またも噎返るやうな日向にでると
びんつけ油の匂ひ。

怖い眼をぬすんで

そつと見つけた水すましよ、

脆く、とろけてゆく MOODS

泥溝には夢が光る。

47

ほろびゆくもの

えびそおど

1

ぶすぶすと希望のぞみのほめき、

冷酷な冬の理性の

光より薄さをんなの愛、

不安の空は信實なるゆめを求め

灰色にふせし眼まぶたよ。

しづかなる力を感じ
而して躊躇はず、
赤きしぐなる燈、上る。

空をさ迷ふ樹葉の如く
わが蝙蝠は悲しみ、
こころの闇を飛びかふ。

冬は信實な心、
冬は斷末魔の聲、
冬はかなしき接吻なれ、
或は、死ぬる女の美しさ、
勿體ないほど美しいその雪空の
そつと沁んでゆく色を
ばんかの如く、
餓えたわが靈は
しかと兩手に掴んで泣く。

暖爐の上なる猫は

こころよく眠り、

圓い時計盤より滴る青い夢、

垂直に、力をぬいて、

ぶらりとぶら下つた銅色の振子ふりこに

すがりつき、

あらゆる幸福は黙もだす。

「時は一つ所で

ながれてゐる、

そして「現實」を凝視みつめてゐる。

にぎやかな線畫の如く、
水かけらふが揺れる。

どこかで、

光が呼んでゐる。

いのちよ、何がうれしいのか、
もののほめきの忍びやかなる
さぐりよるめしひの手つき、
芽は感覺に――

かほ

としよりのかほをみるは
ふゆのひのけはしきそらを見るがごとし。
ひたひなるつめのにほひ、
しのものすごきては
ひややかにかけをつくる、
いくすぢの、こはたましひの
うつくしきなげきのしわ、
そのしたに

ひかるめありて、
つくづくともものゆくすゑ、
はた、こしかたをながめつ。
よにおそろしきこともしらで、
ねむるところのいとしさに
ともすればまぶたをぬらす。

騷擾

その曲線を見よ、
あやしき光のだんすを……
しづかなる蠅のあとより陰影は
ものの匂ひを嗅ぎ廻る。
黄に惱む SYMPHONIE.
床の上なるなつかしさを
とりかこむ氣壓よ、

何事もなし、
驗温器に眠る水銀。

AT HER GRAVE

樹の上の
鴉鳴かず、

縷の如くもつれて咽ぶ死の讚美に
淡い勞疲のかがやく時、
會葬者はただ一つの事をわすれてゐる。

冬にして黄^{きいろ}い午後、

梢に鴉がとまつてゐる。

柔かい肌のやうな夕となるも遠からず、

梟は眼をしばたたき、草は冷え、女等は

さすがに受胎をおもはず……

かしこに小さい穴がある。

あはれ、怖しき土の匂ひは、にしきゑの

影の秘密を知らないで、

なんの反抗も處女なれば、

そして欺かれて眠つたのは

十字架に聖^{きよ}くゆるせし瑪瑙の靈魂

その穴のふかさよ、

その穴の周圍は次第に暗くなる、

梢に鴉がとまつてゐる。

現世ばかりは悲しみの、一日の疲勞の
後の

此の心地よさを何としやう？

さびしくかくれて涙に浮ぶ微笑の
此の愛の暗示を誰かは知る？

冬の歌

ふゆのひのなごりの

CHORUSが、

かはのおもに

みづとりのゆめをながして、

みづとりのはねのかがやき、

うすいろのゆめをながして。

雪

ぺらぺらと

枯草は小さいうれしさに燃え、

どこか芝居の春景の

缺てきざんだ紙の白さに、

冬の日ぐれをちらちらと、

わたしの胸に雪がふる。

ぺらぺらと、

—— 焼あとの低い獨唱。

春

ゆるくながれる雪解けの

木目きめのやうな水の夢、

ひそかに芽ぐむなつかしさは

戀をするものに

夢と影とのかたらひよ、

みあかぬ色のうす浅黄あさぎ。

水邊にて

1 水かけらふの歌

雲を見たまへ。

あはれ、心のかげひなたを

冬と春とのゆきずり、

それとしもなき鐘が鳴る。

鐘が鳴る。

鐘より淡きおもひ出の

晝なれば窓の硝子の神経に射す

水かけらふの悲し

II 譬喩

ころころ柳、猫柳……

おちつかぬ冬の感覺。

SWANよ

私の「愛」の泥ふかく、

をんなの欲しがる「夜」がある

ころころ柳、猫柳。

赤い灯かげの

私の性は水のにしきゑ。

三人の處女

指をつたふてび、お、ろんに流れよる

晝の憂愁、

然り、かくて纏れる晝の憂愁。

一の處女をSといひ、

二の處女をFといひ、

三の處女をYといふ。

然してこれらの散りゆく花が廢園の噴水

をめぐり、
うつむき、
匂ひみだれてかがやく。

びろんの絃よ！

悲しむ如く、泣く如く

哀訴の、されどころ好き唄をよるこぶ
銀線よ！

晝の憂愁……

理性の廢園

ECSTASY

三味線は憎し、

蛇の肌のなつかしき青光り、

その悲しさに黙すなれ、

われは眠れる EMERALUDE.

ほのかに、ほのかに月の暈

心にひらき、

美しき糸をたどつて「死」手の白

そつと夜はふける。

墓碑に

雛罌粟の

さくをも待たで、

わがともは

土にかへりぬ、雛罌粟の

さくをも待たで……

甞の上の哀歌

眞白き君が蹶おぼろに

ふまれて燃る、われは甞か——

われは現世あやをかなしみて

君を求めず、

夜としなれば我と唯、君が頸うでの青き玉

夢そらごとの SERENADE.

君が瞳まなこに「時」を知る。

そはやはらかに黙もくすなれ

この美しき甞かの上、

ああ、死よ。許せ、くちつけの日に

わすれし泪を、

君が頸うでのその心無き玉。

SONATA

1

彩れる夢の悲しさよ。

わが生命は赤く、

おそろしき美の纖維をふるはせ、

萎みなやめる雛芥子は

わすれたる涙に匂ふ。

彩れる夢の悲しさよ、

「記憶」にかぶ歌のとぎれを

ほろび行くもの、

或は濡れにし生の線條。

ふけてゆくのは夜ばかり

おお、夏よ！

夢は誘はれた

露を紀念のねがひ故。

女の様な無爲のつかれに甦る。

あれさ、お聴き

三味の音を

わたしの胸は悲哀の園

まにら、煙草の

けむりに咽ぶ

月見草の匂ひ

黄い花

SILHOUETTES

1

わが靈の如き、綠玉よ
はかなき生命のかがやきは
鳴かて小鳥の飛ぶが如く、
或は夢にぬれて肌の景色となる。
さてこそ夜の序曲……

雪か懺悔の、枯れにし禾堆の上、

80

わすれて惱む愛欲のめづらしさに
忽ち涙の消去るなれど
時ならず、
胸なる渦の綠玉よ、
その安かさのいたづらなる。

季節は金と赤とに入り、
光は物のかげを匍ふ。

81

見よ、にほやかに夜ぞ下る、
 それとなき月の光を。
 君がうれひに夜ぞ下る、
 夢の如くもにほやかに
 ひと本のしだれ柳を、
 やつれたる蚯蚓みづずの歌を。

燕は、世にも悲しけれ。
 あやめはさけど我が感覺に
 あたらしき希望は歸らず、
 あやめの花のものうさよ。
 あやめの花の、さても白さを、
 我が好めるは
 死の如く、水面に落つる其影、
 惱ましけれどその音なき影。

悲痛を論ず

遠ければ彼方の空
わたしに何のかかはりもない
その空の雲の形。

私の眩しい瞳を指してくる

丘の圃をまつ直に

ほそい懶い CLARINET.

これぞ黒い吊の歌

大麥の穂並の光

微風の様な無限の暗示。

これぞ黒い吊の歌

敷布の上の見つけもの

唯一すぢの短い毛。

愛惜と悲哀

月の冷酷、月のなぐさめ、
淫婦と蛇のひとみに光をもとめつ、
わが黄金の色ざめた心は
「美」の悲哀にある。

86

皮膚に、ぼと燃え上り、
信實を映じた感覺、

「いのち」と「力」と……憂鬱なる

玩具の時計の音、

蜻蛉とんぼに眠るわが靈智よ。

87

夜—夏の RHYTHME

ただれたる眞夏の光、
ひとみを呪へ、夜は躍る。
こざかしき晝顔の
花の如き脆きもの、
露にしほれて嗟嘆す。
いとしや、
眞夏となりつ、
眩めく影。

官能のせせら笑ひよ
みにくき疲勞、
何一つどよみ喚かぬものは無し、
さみしかる心の噴水。

黒いもの

見よ、おそろしい「時」の前兆しるしに
ひなげしの花は美しく、
夜のかがやきに美しく、
音もなく萎れて散つた。

黒いもの、

夜のかがやきに美しく、
その上に、

雨がふる。

黒いもの、

その上に雨がふる。

やすらかに美しく、
心にかへる悲哀よ、
わたしらの園は廢すたれて
その上に雨がふる。

すけつち

まひるの夢をあざける

罅惡な夏の韻律、

腐れる物の美しさから、

光をうたへ、

毒草溝どくそうの金ぼうげ、

蠢うごめく蛆むしをみる微睡まどろみが

むらさき色の純金の

無数の線に陰影かげをひく

愛

小曲

1

秋の日ざしのしづかなる

とほく眼^{まぶた}瞼に浮ぶもの

うすら光のうるほひ

うつくしき心の上に

我は聴く

赤き蜻蛉^{とんぼ}のなげきを

And—you will count before your glass, more kisses
than the lily has. (Raudelaire)

悲みは凡、純白し、
殊に、をんなの頸をいたはり
その頸に匂ひ玉。

煩惱のくもりぞ知る、
——明日を。
その頸の玉ぞ知る、

甲斐なきものと心を。

わが庭の入日よ、
 冬近き樹々の葉、
 冬近きまぶたに
 はらはらと揺らぎつ、
 ちりゆくは過ぎし日、
 稍なる心の
 しのびかに悲しむ。

NOCTURN

*

海の如く
 海よりも瞳は青し。
 女の「幸」ぞかなしけれ、
 うつくしきものは煙の如し
 わが夢の惱める。

*

夕月はわたしを泣かせ、

はつ戀は君を歌はす、
たよりなし、

凌霄花の蔓にかかれる
その花。

*

あちらこちらの青い空、
わが心の漰には

小さな光の渦がまく、

(空こそは君の面なれ)

水すましに近づく死期よ。

銘

(鳥崎藤村様に)

世に、のやし難きは蟋蟀のかなしみなれ、
梢をはなれて心の如き芬香となり、
とこしへのゆめぞ肌のなめらかなる
そも、錆びにしはその月の頬這ふ涙。

木犀

102

木犀の花のかほりに咽ぶ……

秋の日のうすらさみしい光を浴びつつ、

頻りに死をねがふ

あたたかな午後の靈魂^{たましひ}。

涙が胸の上にぼとりぼとりと、

いつのまにか、女は記憶にしのび込み、

その音を聞いてゐたつけが

もう、すやすやと眠つてゐる。

木犀の花が散つたら

……冬……冬……

103

蟋蟀其他

*

ほんにいとしや、
それやこれやも女ゆえ
蟋蟀こはらのかちごと、
煩悶は玉の如し。

*

蟋蟀は
金のきんの小さき十字架を

肌に秘めて、なく、
ゆめよりも悲し。

*

丘の上の
赤き旗は
君が髪のごとく
明日あしたを風に委まかす。

*

われは唯、單純を愛す。
磯山の草は

黄きいろの花をつけぬ、
死ぬべき身なり。

憧憬

譬へば尼の、としわかか、
ともすれば心の弱く、
暮れてゆく日のよろこびに
言ひ難き秋の色あり、
うつくしや、頬なる涙。

かげ

LEITE

はれた蒼穹より
ふる芳香、
それがぬらした
黄い南瓜の花。

晝のねがひの醜さの
おもひ出ばかり、

夢は曲線の陰影を引く。

(戀のむだ花…)

夏のMOODS

雨こそ銀の槍の穂。

無常と月光

ひなげしの花は悲し。

尼の如く、

狂ほしき月の園、

おぼろに匂ふ。

ま白き肌に媚びて、知る
秘密のめざめ美しけれ、
やすらかに眠れる

淫らなるわが靈たましひ

112

ゆめの、ひなげしの怖れよ、
くちつけなれば
軽らかにこそ、
わが靈のぬれたる。

影の ELEGIE

やはらかさよ、
ふめばくづれる沙すなの上、
もだす光の溺れぬる。
(美しき死をこそ、思へ)

沙の上の月見草、
ためぬきを水の如く、
いろざめし真晝まひるの

113

さりとして、心よき推移。

114

月見草かすかに、
よりそふは悲しき影
ただふたつ、
其影のながれず。

桔梗と蝸

にしき糸のうみのいろよりかなじきは
むらさきのこきがため、
ききやうのはなは
ひるのひのひかりをつつんで
そとしぼむ。
かべのうへ、こころに
せまるたそがれの、
なつのおもひのあはただしさよ
もりのひぐらし。

115

哀悼

しきりに芳香にほひの
散る晝なれど、
そは、常のこと。

女は毒草……いぢらしき放埒に
をぼれて悩むわが微睡まどろみ……
小さきものは生命いのちなれ。

いまさらの

過去にうく泡の如き
夢のつながり、

軽く、その官能を花の如く、
月よ。或は睡の如く、
唯ただ何も思ひたくなし。

賜物

いとしや、

肌のなめらかなる

しきりに涙ながる。

わが愛欲の花は、ほの白、
つかれながらに匂ふなれ、
林檎の様な心はめざめに
ほと嘆息す。

廢園辭

秋草は紫苑しきんと芒すすきと……

しほらしや

その他、

ぱつたりと絶えた音楽、
美しい晝の悲哀は
梢を匍ふて雨となり、
そこに、さみしい銅像が

しよんぼり影の様に立つ。

卓上

ひえびえとこつぶの陰影

薄荷草は

をんなの様なるきづかひに
ひよろりと伸びる。

一ばいの七分は

夢の泡となり、

さみしさに曹達水

脆き生命をひきくらべつ、
芬香はあたりに斑の如し。

賦

秋の日は瑪瑙の如し、
空行く雁のさみしからまし
わがゆめの
一列のながき思ひ出……

雨

晝の殊更、

さらさらと

忍びやかなる、

且て、をんなの腕かひでの如く、

雨は現在いま、錆びにし涙。

風景

風景

蝸かまかなは、雨の如し

君が髪毛かみげは

廢園の草より長く、

もとめし秘密のよろこびに

君とあれども安からず、

時は八月、

梢なる真畫マコトの空

空をながむる我が心

いとほしや、ぬれにし眼まぶた。

午後

おばらのはなのかなしみ……

あかいころの、

はかなさぞ

とりとめなく……

いのちのやうなはなのうろこはおち、

つちのうへに

まぼろしをえがける。

かぢやのかべはひわれて
とんかんとひねもす、
まぼろしをゑがける。

それもみみなれし

ふうふもの、

われとわがいはりをみつめ、
さみしさにわらふあかんぼ。

ひるすぎのにはの

あまいつかれよ
あかんぼのゆびのさきまで
ひかげは
おともなくはひよる。

秋の日の事實

I 噴水

——譬喩たとえは、悲し。

秋の日の、

噴水の、

やすらかに眠れる。

こしかたに

搖げるは

ひめにし「幸」か、

いたまし。

玉の如く、

なやむ心の

さてこそ、

脆きその夢。

II 所現

その眼にとめた
空は餘あまに悲しかる、
そして小ちさかる、
赤とんぼ。

秋の入日の
うつくしや、心の如し。

III 屋根の草

青い心にかがやくものは屋根の草
いとしや、明日あしたを繰返し

又雨のひそひそと……

屋根の草は黄きいろい花をつけて濡れ、
わが神経は白金はくごんの様に眠る。

女よ、女よ。愛はおぼれて暗がり

を
螢の様に

ぼうと飛ぶ。

IV 不可解

ながれ行く――

雲はかなしや――

音もなし

秋の日の

その雲――

わが愛の如き

もろさに――

ふく風のうつくし

目次

序

SAGESSE

I 創造の悲哀

獨唱……………一

黒き猫……………三

河岸……………四

心……………六

とかげ……………八 II

沈思と楳梓……………一〇

沼……………二

IDEAL……………三

II 性慾と靈智

冬の辭……………二五

孤獨と執着……………一六

途上所見……………一八

1……………一九

2……………二

冬……………

1……………三

2……………二五

眺望……………二七

III 聲

人生……………二九

勤行夜牀章……………三一

猫……………三七

III

BEAUTY.....三六

IV

愛.....四〇

力.....三二

光

明石町のシヅエ様に.....四三

光.....四五

ほろびゆくもの

えびそおど.....

1.....四九

2.....五一

3.....五三

4.....五四

かほ.....五五

騒擾.....五七

AT HER GRAVE.....五九

冬の歌.....六三

雪.....六四

春.....六五

V

水邊にて……………

I 水かげらふの歌……………六

II 譬喩……………六

三人の處女……………九

理性の廢園

ECSTASY……………七

墓碑に……………七

甕の上の哀歌……………七

SONATA……………

1……………七

2……………七

SILHOUETTES……………

1……………八

2……………八

3……………八

悲痛を論ず……………八

愛惜と悲哀……………八

夜——夏の RYTHME……………八

黒いもの……………九

すけっち……………九

愛

小曲

1 九五

2 九六

3 九八

NOCTURN 九九

銘 一〇一

木犀 一〇三

蟋蟀其他 一〇四

憧憬

..... 一〇七

かげ

LETTE 一〇八

無常と月光 一一〇

影の ELEGIE 一一三

桔梗と蝸 一一四

哀悼 一二六

賜物 一二八

廢園辭 一二九

卓上……………一三一
X

賦……………一三三

雨……………一三四

風景

風景……………一三五

午後……………一三七

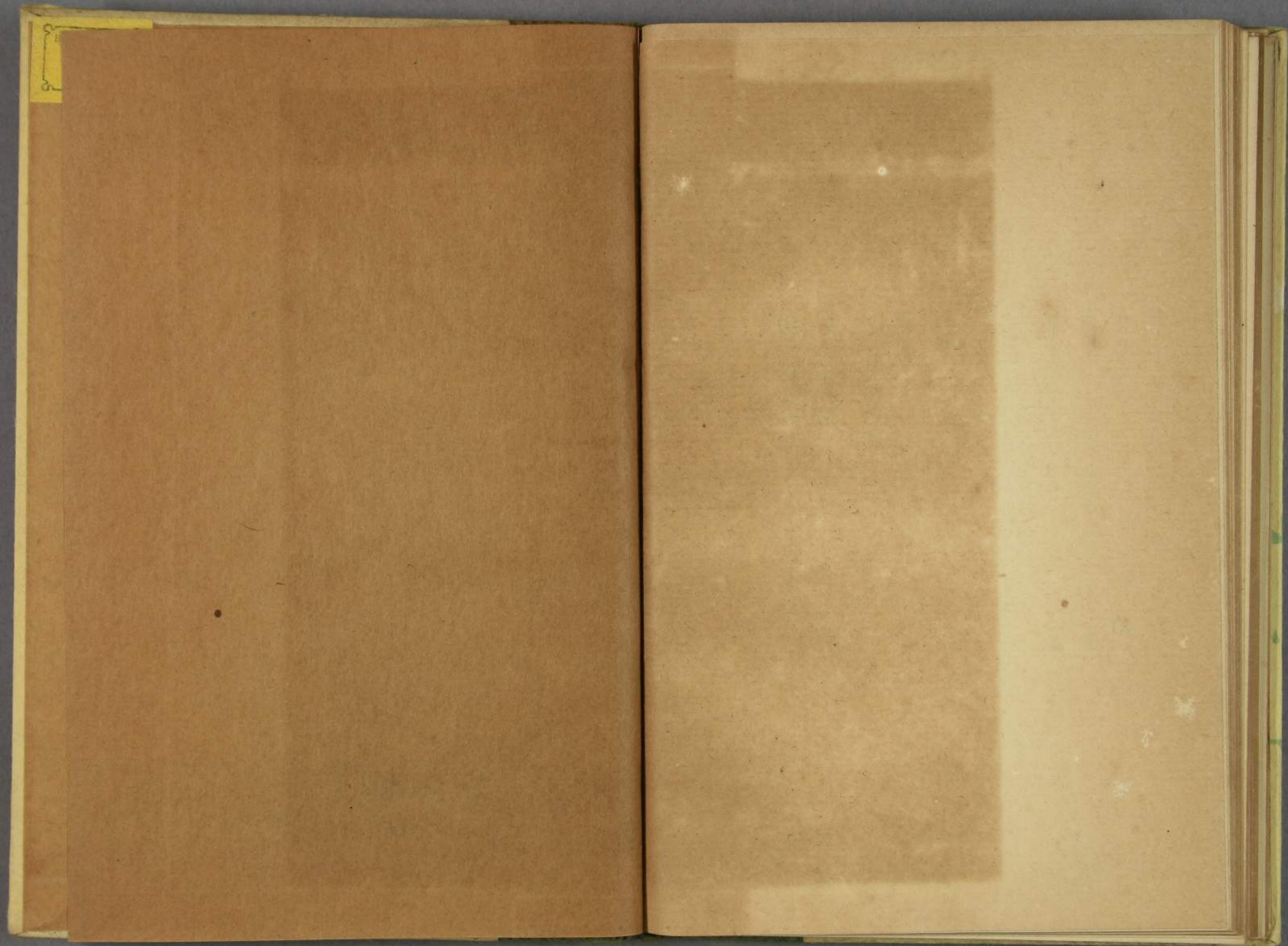
秋の日の事實……………

I 噴水……………一三〇

II 所現……………一三三

III 屋根の草……………一三三

IV 不可解……………一三四



BENKYODO-SHOTEN
TOKYO

大正二年五月十日印刷
大正二年五月十三日發行

三人の處女集行
(定價六十五錢)



著者 山村 春 島
發行人 小泉 平 十郎
東京府下豊多摩郡澁谷町下澁谷三百七十四番地

同 郡 山 幸 男
東京市小石川區大塚町廿五番地

印刷人 仙葉 元 太郎
東京市京橋區西紺屋町二十七番地

印刷所 株式會社 英 合
東京市京橋區西紺屋町二十七番地

發行所
東京府豊多摩郡澁谷町下澁谷三百七十四番地
新聲社